# 異形討滅！

八重代かりす

## 一‥気をつけよう。北の大地は、魑魅魍魎。

夕暮れの森――

あたしは追われていた。

それも相手は複数の男、野盗たちにである。

野盗？　現代日本にそんなものがいるのか？――と思ったそこのあなた。

いるんです。北海道には。

何しろ、件の《荒夏事変》で日本中が大混乱！　発端の飛天市なんて、ＬＩＣ／低烈度紛争地域（Low-Intensity Conflic）になっちゃった！　勿論、本州以南は事変前の落ち着きを取り戻している。

けど、ここ北海道は話が別。

元凶になった第一飛天市の所在地だし、荒夏が滅んで連中の《異形》も大半が管理外状態だし、元々飛天市建設には胡散臭い連中も多く関わっていたし。

それらが今、溢れ出している。

ま、地域差はあるから一概には言えないけどね。

それでも、今や北海道はまるで異世界。リアル試される大地になっちゃった事に変わりはない。

おかげで、今時、野盗なんてものもいる。

そして、華奢な乙女たるあたしは、むっさい野盗の集団に追われていた。それも、いつ追い付かれてもおかしくない有り様だった。

ああ、可憐なる美少女、キャロットの運命は？！

――と。

そこであたしの足が止まる。

森の獣道には、ミズナラなどの落葉広葉樹に、トドマツやエゾマツなどの常緑針葉樹が入り混じっている。昼間なら視界はさほど悪くはない。しかし、日が落ちる頃ともなれば、話が別。おまけにあたしは明かりを点けていない。

そんな闇が無限に続くような一本道。

傍目には先程までと変わりない。

が――。

あたしはその気配を読み取った。

――囲まれている。

どうも、装備と地形を活かして先回りしたらしい。

あたしはわざと低い声を出す。

「ちょっとなめていたよ。意外と練度高いじゃん」

返事はない。だから、あたしは背中の木に寄りかかかった。我慢比べになれば、あたしの方が有利だ。元々そういう位置取りはしてある。

そして、じっと相手が潜んでいる一点を見つめる。

すると、男の方がしびれを切らしたらしい。ずこずこと姿を現した（忍耐のない奴である）。

「何故わかった……？」

「勿論、気配だよ」

あたしは即答する。だが、男は驚くばかりだった。ついでにもっとビビらせてやる事にする。

「他に隠れているのは、ひい、ふう、みい、よう、いつ……へえ５人か。あなたを入れて全部で６人。頑張って集めたね」

男は一歩後ずさる。そこで踏み止まったのはなけなしの矜持（プライド）ゆえか。

「馬鹿な。まるで魔法だ」

「いいね。じゃあ、あたしは一流の天才美少女魔法使いということで」

「……」

男は黙り込んだ。

無理もない。男は大柄で髭面で、全身から『野盗です！』という雰囲気を漂わせていたが、装備だけは一丁前に潜伏用のものを揃えていた。迷彩服や暗視装置まで併用して、森に隠れていた。一方でこのあたしは原始的な照明装置ですら使っていない。なのに、何故伏兵まで看破されるのか？　そんなところだろう。

それはあたしの『ちょっと異常なカンの良さ』に秘密があるのだが……。

ここで教えてやる義理もない。せいぜい怯えてもらう事にしよう。

「いや……お嬢ちゃんが素人でない事はわかっていた」

「そうなの？」

「ああ、正直お嬢ちゃんとやり合いたくない。いやはや大したものだよ。アニキ達もあっさり焼け死んじまった。アジトに投げ込んだのは焼夷手榴弾か何かだろう？　おまけに俺

達が火の手に気を取られている隙に、物資は盗まれてやがる。まるで、中国人みたいな手口だ」

うん。そーいう差別的な物言いはどうかと思うよ。

とはいえ、事実関係だけ見れば、それ程、間違ってはいない。

旅の最中、野党のアジトを見つけたあたしは、彼らのねぐらから少しばかりの物資弾薬を頂戴したわけである。

本当にほんの少しばかりである。疑うのは勝手だが、あたし一人が持ち運べる物資弾薬には自ずと限りがある。

それをこいつらはしつこく追いかけてきやがったのだ（あー、ケチくさ）。

「言っておくが、これは褒めているんだぜ」

はいはい、ありがとうね。

「――で、普通なら、俺もアニキの仇をとらなきゃいけねえ。それが筋ってもんだ。けどな……」

あれ、話の流れがおかしくなってきたぞ。

「お嬢ちゃんは殺すには惜しい。どうだ。俺達と手を組んでみないか？」

はあ？

「盗んだものを返して、俺たちの仲間になるなら、死んだアニキや仲間の事も忘れよう。どうだ？」

「……」

「なあに、そんな難しい事じゃねえよ。お嬢ちゃんだってあの手際の良さだ。まともな世界に居場所なんてねえんだろう？　だったら、俺達と仲良くやっていけばいいじゃねえか。勿論、色々といい思いもさせてやるぜ。な、悪い話じゃねえだろ？」

男はねっとりとした視線を隠そうともしなかった。

あーもしかして、これはあれか？

こいつは先日までそのアニキとやらの手下だった。しかし、あたしがそのアニキとやらを知らない間に殺していたせいで、そのアニキとやらの地位――その野盗組織の頭目の座が回ってきたのだ。

で、報復という見せしめか、物資を取り返すためか、理由はわからないが、あたしを追いかけてきて、あたしをその目で見て……欲しくなったのだ。

あたしの技能と肉体が――。

この超絶美少女キャロット・マリオン十五歳が欲しくなったのだ。

まー、わからなくもない。

あたしの美貌は語るまでもない。

ついでに身体のメリハリもかなり大きい。形がよい乳房はトップの数字こそ控えめだが、折れそうなほど細いウェストと相成って、６０のＥを叩きだしている！

そして、今付けている≪タマゴロモ≫は身体の線がはっきり出る造りだ。具体的には伸縮自在で肌にぴっちり張り付く特殊繊維である。あたしの体型に合わせて、２％縮小成形され、その厚さ２ミリ以下！　それが首から下を覆っている。露出自体は低いが、人によっては裸同然という者もいるぐらいだ。

つまり……極上美少女のナイスバディが目の前にあるわけだ。野盗がムラムラするのも無理はない。

けど、あたしはお断りである。

何が悲しくて、こんな底辺野盗団の仲間にならねばならない？　こいつらに御酌する自分を想像するだけでゾッとする。生理的に嫌。あたしの身体は最高級品である。こんな安っぽい連中に売り渡すつもりはない。

「で、どうする？」

「……」

あたしは沈黙を貫いた。

「……返事は早い方がいいぜ」

やーい。ビビってやがんのー。あたしの地声はアニメみたいにきゃぴきゃぴしてるから、話してやるとあっちも安心するんだろうけどねー。

だが、男は頭を切り替えたらしい。

「十数える。その間に返事をしろ」

とありがちな指示を出す（テレビで覚えただろうか？）。

「１、２、３、４、５、６、７……」

「断る」

あたしは途中で話をぶった切ってやった。そして、背中の銃器に頼る事にする。

「ならば……」

その時だ。

「やめなさい」

清冽な声が辺りに響いた。

驚いて声の主に目を向ける。

これは男だけではない。あたしも含めての話だ。何しろ、『彼女』の気配にはまるで気付かなかったのだ。

一人の女子高生？が立っていた。

黄昏の下、黒いポニーテールと翻るブレザースカートが麗しい。

キリリとした美貌の長身痩躯、その美脚をタイツとブーツらしきものに包み、その両腕は手袋で覆われ――その腰には一振りの日本刀があった。

異様な雰囲気だった。

あたしも十五歳美少女だが、こういう時に女子高生（多分、あたしより二つほど歳上）が助けにくるのは異常である。おまけにその女子高生の得物が日本刀ともなれば、夢幻を疑いたくなる。

しかし、その女子高生は夢幻などではなかった。

「今すぐその娘から離れ、ここから立ち去りなさい。そうすれば、私も見逃しましょう」

「な、何だ。貴様は？　というか、今時、刀だと……？」

野盗の男は男で、突然の闖入者とその武装に仰天しているようだった。これまでかろうじて、保ってきた威厳もかなぐり捨てている。無理もない。今時、日本刀など時代錯誤も……。

待てよ、時代錯誤……かな？

あたしはそこで気付いた。その女子高生は女性にしてはかなりの長身で、背丈は１７０センチ程だろう。そこから、推定するとあの日本刀は刃渡りだけで１２０センチ近い。

いわゆる『野太刀』に似てるけれど、そんなものの現存数は極端に少ないはずだから……。

……いや、現代社会で日本刀振り回している時点でやっぱり時代錯誤か。

同じ事を男の方も思ったらしい。

「お嬢ちゃん、刀でコレに敵うないでしょ」

そう言って、男は自動拳銃を女子高生に向ける。見せびらかすようにして。けらけら笑って。片手で。

この時点でこの男の底が知れる。が、こんな男でも銃器を手に入れられるのが今の北海道だった。世界一の水準だった日本の銃規制も、荒夏事変以降、綻びが広がっている。

「つーか、キミ、何者？　状況わかってんの？」

「貴様に名乗る名は無い」

……その女子高生は漫画みたいな事を言いやがった。

まー、たしかに、こういう時には、誰かが助けに入ってくれるのがお約束だ。それも何

故か美形で、凄腕だったりする事が多い。
「そして、わかっていないのは貴様の方」
「なん……」
「もう、あたしの間合いよ」
言葉通りだった。
女子高生は一瞬で間合いを詰めていた。
一足一刀。そこまで近づかれて、男はようやく気付く。
「……だと……！」
慌てて真面目に拳銃の照準を合わせる。が、もう遅い。
女子高生の居合抜きは男の首を刎ねていた。
――このお姉さん……強い。
あたしは息を飲んだ。
第一に早い。相手の動きを見切り、先手を打つ早さがある。
第二に速い。相手の懐に入る為の、踏み込みの速さがある。
第三に迅い。相手の首を一太刀で刎ねる、抜き打ちの迅さがある。
元々、鞘から刃渡り１２０センチを淀みなく抜刀できるだけでも大したものなのだ。しかも、彼女はそのまま居合で首を刎ねている。肉と脂に包まれた頚椎を一断ちにする力量、その凄まじさは語るまでもない。
……認めよう。この女子高生、刃物の扱いではあたしよりも、はるかに上だ。
そして――
「残り五人はどうする？　ここで命を捨てたい？」
帯刀女子高生の冷たい台詞で勝敗は決した。
あれよあれよと言う間に、残り五人の気配は遠ざかっていく。
あたしでも気配を追えなくなった頃になって、女子高生は野太刀（仮にこう呼ぶ事にする）の血糊を布で拭いた。さらにその布を男の死体の上に置いて、野太刀を鞘に納める。
見事な手並みだった。惚れ惚れするとはまさにこの事。
いや、実際、あたしは頬が紅潮しているのを自覚した。
だが、彼女はそんなあたしを怪訝な目で見る。
じーーーとあたしを凝視している。
――ふふふ、嫌だっ。お姉さまったら、そんなあたしを見つめちゃって……！

繰り返すが、あたしはとびっきりの美少女だ。
清楚に整った顔（かんばせ）。雀斑（そばかす）一つない完璧な皓（しろ）さの肌。人参色にも似た、長く波打つ美しい栗毛。嘘のように細い腰と長い足に、若々しい張りの小さなお尻。これらが奇跡的な調和を成し、小柄で華奢で保護欲をそそる極上の美少女となっている。
おまけに、大きく円らな双眸は、世にも珍しい《赤眼（ルビーアイ）》――！
お姉さまはそれをじっと見つめている。
これはお姉さまが助けた少女の可愛らしさに感動しているに違いない。
と、思ったら、彼女は妙な事を聞いてきた。
「……怯えないの？」
「え？」
あたしが戸惑うと、彼女は首を振って話を切り替えた。
「……いいえ。それよりも怪我はない？」
「は、はい。ありがとうございます。お姉さま！」
そう言って、あたしは彼女の腕に抱きついた。
なお、ここで胸の膨らみを押し付けるのが重要である。
あたしの自慢のＥカップである。彼女も悪い気はするまい。
実際、彼女がボソッと
「巨乳か……」
とつぶやいたのをあたしは聞き逃さなかった。おお、これは脈アリ？
「……おっぱい星人って苦手なのよね……」
なん……だと……！？
「しかも、ロリ巨乳？　あー、あざとい」
ロリ……だと……！？
た、たしかにあたしの身長は１５０センチに満たない。顔立ちも幼げだ。かのロリータこと、ドロレス・ヘイズを髣髴とさせる事は認めよう。
しかし、巨乳の何が悪い！？
重いし、弾むし、垂れるし、汗がたまるし、肩がこるし、下着も上着も制限されるし……色々と大変なんだぞ！
なのに、下品だの頭悪そうだの誘っているだの、好き放題言われるんだぞ！
それなのに、おっぱい星人？　ロリ巨乳はあざとい？
自分が長身痩躯（推定Ｂカップ）だからって、好き放題言ってるんじゃない！
大体、おっぱい星人の使い方が間違っている！

……そんな不満が咽喉元まで出かかったが、ぐっとこらえる。

彼女はずっと小声で話していた。あたしが耳の性能もいいから聞こえただけで、本人は聞こえないように呟いたのだろう。

それに彼女に助けてもらったのは間違いない。とりあえず、礼は言わねばならない。

「ど、どうも、ありがとうございました～」

「礼には及ばないわ」

あたしの複雑な内面を知ってか知らずか、彼女は鉄面皮を崩さなかった。

そして彼女の方から自己紹介を始める。

「私は松前汀（まつまえ みぎわ）。歳は十七。あなたは？」

「えへへ。あたし、キャロット・マリオン、十五歳です」

「ふーん。『マリオン』ね？」

汀は意味ありげに相槌を打ったが、あたしは気にせず続ける。

「はいっ。身長１４７センチ体重３９キロ。スリーサイズは上から、８２・５３・８２、６０のＥカップですっ」

「誰もそこまで聞いていないわ」

松前汀は頭を押さえて冷たく返した。うーん、こっちが個人情報を明かせば、あっちも教えてくれるかと思ったが残念。挙句……、

「もっとも、あなたに一般常識がないとはっきりした事は、収穫かしら？」

との事。……日本刀を振り回す女子高生に言われたくないんですがね……。

「それでキャロットちゃん。あなたの保護者はどこ？　お母さんかお姉さんが一緒じゃないの？」

「いえ、一人旅です。……ていうか、あたしはもう十五歳なんですけど……」

「十五なんて、まだ子供よ。一人旅なんて、本州以南でも危ないわ。まして、ここは『試される大地』北海道なんだから」

……じゃあ、十七歳のあなたはどうなるんです……？

と、率直に聞きたかったが、あたしは日本人である。だから、言い回しは自然と婉曲になる。

「そういう汀さんこそ、学校は行かなくていいんですか？　そのブレザー、学校の制服ですよね？」

「そうよ。これは学生服。そして、これも学校の校外学習だ？！

嘘つけ！　どーいう校外学習だ？！

「でも、それもここまで」

「え？」

「当然でしょう。私はあなたを『保護』しないといけないもの。校外学習は一時中断するわ」

松前汀はそう言って、真っ直ぐにあたしを見つめてきた。こ、このお姉さん、人を見る時、必ず直視する癖でもあるのか？　いやしかし、これはちょっとクラっと来てしまう構図かも……。

「って、『保護』？」

冗談ではない。せっかく気ままに一人旅をしているのに、今更『保護』なんてされたくない。だというのに、松前汀は一方的に話を進める。

「そうよ。お嬢ちゃんをおうちまで連れて行ってあげるわ」

「いや、おうちって……」

……それが十五歳に対する言葉か？

「さ、お嬢ちゃんのおうちはどこ？」

「苫小牧（とまこまい）市……」

あたしは渋々白状した。嘘ではない。あたしは苫小牧（とまこまい）で幼少期を過ごしたのだから。

「なら、あたしがそこまで案内するわ。いいわね？」

「は、はい」

こんな感じであたしは説得されてしまった。色々情けないが……いや、発想を変えよう。久々に『実家』の様子を見てくるのも悪くない。

それに彼女は――松前汀は見ず知らずのあたしを助けてくれた。身を呈して、戦ってくれた。今だって、あたしを気遣ってくれている。そこに心を打たれない程、あたしはまだスレてはいない。

だから、改めて、言う事にした。

「あの、本当にありがとうございました」

「……そんな必要なかったかもしれないけどね」

「え……」

「その《TAMAGOROMO（タマゴロモ）》――『緊張分析（Tension Analyzer）・運動分析（Motion Analyzer）・成長観察（Growth Observer）・相互有機（Reciprocal Oganic）メモリオブジェクト（Memory object）』……どこで作ったの？」

「……！」

うん、このお姉さん、いい人なんだろうけれど、油断がならない。

あたしが言い淀んでいると……。

「まあ、いいわ」

と、松前汀はそこで話を終えてくれた。ただその後、やはり小声で呟いた台詞も聞こえてしまった。

「はあ。苫小牧（とまこまい）市まで子供のお守りか……」

うん、このお姉さん、いい人なんだろうけれど、苛々させてくれる。

＊＊＊

二人でしばらく歩いた後――

「やはり、今日中に人里へ辿り着くのは無理ね」

という汀の判断により、山中で野宿をする事になった。

まー、雨も降りそうにないし、それでいいか……ということで、あたしも追従する。

「私は個人用の天幕（テント）と寝袋（シュラフ）を持っているわ」

そういって、汀は彼女自身の背嚢（バックパック）を示す。例の野太刀を入れるためにか、細長い形状をしていた。

「君は？」

「このタマゴロモ自体の保温性は高いし、寝袋（シュラフ）がわりの外套（マント）もあるよ」

だから大丈夫、そう言うと汀は薄く微笑んだ。

「そう、なら、私の天幕（テント）を立てたら、寝袋は二人別々でいいわね」

「あ……」

しまった……！　せっかく綺麗なお姉さんとの同衾の機会を逃してしまった……！

そんな下心を知ってか知らずが、汀は淡々と天幕（テント）を張り始めた。

そして、彼女は感慨深げに言う。

「便利になったものね」

「何が？」

「野営がよ。私が子供の頃はこんなに簡単ではなかった。キャンプももっと暖かい南で、しかも重い荷物を持つのが普通だったんだから」

「そうなの？　野営具の基本設計なんて百年単位で変化していな気がするけど……」

「勿論、設計面ではほぼ完成されていたわ。でも素材系の進歩が凄いから」

「結晶細胞系？」

「を含む《荒夏》由来の技術ね」

あたしはちょっと皮肉な気分になった。

――秘密結社《荒夏》。

それは日本初の先進計画城壁都市《飛天市》誕生の裏に潜んでいた『自由を求めた悪の秘密結社』の名である。

元々、飛天市は右派経済学の実験場として用意された。規制を緩和し、法人税も廃止し、所得税すら非累進化する。発生する失業者には余剰生産力をベーシックインカムみたいな形で再分配すればいい――という本土では受け容れがたい方針を試すための箱舟であり、舟板だった。

だが、この《荒夏》はさらなる自由主義の権化だった。産業の高度化と経済の国際化が齎す社会問題を『民族主義を基盤とする国民国家から、自分たちを切り離す』事で解決しようとした程だ。

しかし、それは国民国家が多数を占めるこの世界では『悪の秘密結社』そのものである。結果、既存の国民国家政府から袋叩きにされた。西南戦争以来百数十年ぶりとなる内戦の勃発だ。

これがいわゆる《荒夏事変》である。

――その結果、《荒夏》は敗北。

結局、飛天市は日本唯一のＬＩＣ／低烈度紛争地域（Low-Intensity Conflic）にまで落ちぶれた後、純粋な行政特区としてやり直す羽目になる。

ただし、《荒夏》も『独立』のために無為無策ではなかった。

人口では圧倒的に不利だった彼らはその分を技術開発で補った。元々が高学歴高所得の集団だから、親和性が高い。また、それを除いても、行政特区として規制緩和された結果、異様に先鋭化した技術がいくつもある。

例えば、結晶細胞と呼ばれる擬似分子アセンブラーがその代表格である。

技術的な詳細は省くが、この結晶細胞は疑似がついても分子アセンブラーである。素材系の進歩だけでも凄まじいものがあった。あたしが着ている体に密着するタマゴロモや汀が使っている野営具もその産物である。

――それこそあたしも……。

そこで、ふと気配を感じた。

「汀……」

「何？」

「熊よ。多分あっち……」

あたしが指差すと、汀もその手を野営具から、野太刀へと伸ばす。

その先には一匹の熊がいた。エゾヒグマなのだろう。後ろ姿なので、大きな犬にも見えるが……。

あたしも銃を手に取り、こちらから近づこうとする。
と、そこで汀が引きとめた。
「何をする気？」
「勿論、自衛と食料確保」
「生態系を不必要に荒らすのは感心しないわ。携帯食料はまだ十分にあるしね」
汀が委員長的発言をした。たしかにヒグマは割と凶暴だが、興味のない人間を襲いかかる程ではない。だが、その後に続く
「第一、熊の肉なんて、クセが強くて、美味しいものでもないでしょう」
というのが本音な気がしないでもない。うーん、あたしはああいうクセという名の風味が好きだけどなー。まー、素人が処理しても、美味しくはならないと言われれば……
そこでそのエゾヒグマがこちらに振り向いた。
あたしと汀に薄い緊張が走る。
しかし、そのヒグマは口に魚をくわえていた。そして、そのまま立ち去った。
「あれって……」
「鮭（さけ）ね……」

あたしたちはすぐ携帯端末で近くの川を検索した。

川に辿り着いたあたしたちは凄まじい光景を見た。
一言で言えば、鮭が川を上っているだけなのだが、その規模が凄い。歩いて渡れそうな小川なのだが、その……
「川を鮭が埋め尽くしているの……？」
「……和人（シサム）が北海道（ヤウンモシリ）にやってくる前はいつもこうだったと伝えられているけど……」
「今や、某原発周辺と同じ理屈で、野生動物の宝庫ってわけか……」
荒夏事変の結果、大量の《異形》が正規の管理下を離れた。異形自体のヒトへの直接的な危険性はともかく、自然環境への影響はそれ程でもない（そーいう風に作られている）。そのため、異形を恐れた人間が去り、異形を恐れない動物が残った。誰が決めたわけでもない禁猟禁漁区となり、その結果がこれというわけだ。
「それにしても、鮭……鮭かぁ……」
汀が生唾を飲むのを、あたしは聞き逃さなかった。
「さ？　生態系云々をどうする？」

釣り上げる必要すらない。掴み取っては、手近な石で叩き殺し、すぐ火にかける。一応、指を噛み切られないように注意するだけで十分だった。

その後、汀はしたり顔で

「できれば、冷凍（ルイベ）して、生で、いただきたいものね」

とか言っていたが、塩をかけ焼き鮭に貪りついているのだから、説得力はない。

勿論、あたしもガっついてはいた。いやだって、焼き鮭に塩だよ。まさに真なる食（シベ）物！

神の魚（カムイチエプ）！　石で砕いた頭が何とも言えない気分にさせるものの、その美味しさには逆らえない。

それに加えて、夜の闇の中、火を焚くと人は興奮するものである。

だから、あたしは盛り上がったところで、「夜が怖いの、一緒に寝て。お姉さま！」と抱きつこうとしてみたが……

あえなく、蹴飛ばされた。

その夜の簡易天幕は同じだったが、寝袋は別だった。残念。

＊＊＊

「……大人しくしているのよ」

「はーい」

あたしは汀に笑顔で返事した。

野営一泊の後、あたしたちは朝から歩き続け、昼には千歳（ちとせ）市――苫小牧から約三十キロメートル――に辿り着いた。……記述がまるで中世ファンタジーだって？　そこが『試される大地』北海道だと思って欲しい。異形が出る前から、『ジャスコまで　100ｋｍ』とかの看板がある世界だったのだ。

とはいえ、ここ千歳は空港と自衛隊基地のおかげで宿も多い。また元々、年頃の乙女二人が何日も野宿している方がおかしいのだ。そんなわけで、今日は中堅ビジネスホテルに一泊する事になった。

そして、二人で部屋に入った途端、汀が「では、消耗品を仕入れてくるわ」と部屋を出ようとしたのだ。ひょっとしたら、あたしには聞かれたくない電話連絡でもするのだろうかと邪推もしたが……

「その間、あたしはお風呂で髪と肌を丹念に洗っておきますねー。ぐへへへ」

「……」

てな感じで、汀を見送った。

そして、あたしは一人になって一息ついた。

「さて……」

あたしはまず背嚢や外套を外し、タマゴロモ――身体に密着する極薄のぴっちりスーツだけになる。そして、その背中にある円状の穴から、身体を抜き出す。この時、自慢のEカップが張り付いて、ちょっと抜き出しにくいのは御愛嬌ｗ

ちなみに、タマゴロモの下は全裸だ。元々、タマゴロモは体型矯正を含めた下着の機能を完備している。そもそも、タマゴロモは文字通り《ＴＡＭＡＧＯＲＯＭＯ（タマゴロモ）》――『緊張分析（Tension Analyzer）・運動分析（Motion Analyzer）・成長観察（Growth Observer）・相互有機メモリオブジェクト（Reciprocal Organic Memory Object）』なのだ。肌と密着させねば、機能しない。

そして、このタマゴロモこそがあたしの『ちょっと異常なカンの良さ』の秘密でもある。タマゴロモの上に多くを身に付けないのもそのためなのだが……まあ、ここでグタグタ説明する必要もないだろう。

背嚢から取り出した汎用端末とタマゴロモ、及び部屋の電源を接続。設定更新を始める。

この作業はしばらくかかる上、今のあたしは全裸だ。汀に言った通り、髪と肌を丹念に洗うため、あたしはお風呂に入る。

部屋に備え付けの浴室は及第点だった。

簡素だが、清潔。大きな鏡があるのもいい。これなら、ああしもあたしの美しい裸をたっぷりじっくりなめ回せる。

見事にくびれた腰や麗しいお尻、特に大きく美しい乳房。

いや、タマゴロモは体の線を隠さないので、その辺りは前々から丸わかりだった。

しかし、さすがのタマゴロモも色は隠す。それを脱いだ今、すべてがあらわになる。

どこまでも機能的で律動的な筋肉。腹もうっすらと割れている。

細くしなやかに、引き締まった手に、むっちりとした足。

そして、自慢のEカップ。その大きさ故に鏡に映すと、下は当然ながら、上にすら、薄い影がつく！　勿論、その先端は桜色！

さらに……その太腿の間は……！

と、一人で妄想を爆発させている時、廊下から部屋の鍵が外される音がした。

「ん、汀？　早かったねー」

あたしが汀と判断した理由は二つ。

一つは、このビジネスホテルは一応自動施錠（オートロック）だから。当然、解錠者は汀である可能性が高い。

もう一つは、その気配が汀だったからだ。あたしはタマゴロモなしでも、この程度の気配は読める。そのためにも浴室の戸をわずかに開けておいたのだ。

「キャロットは……お風呂ね？」

「ぬふふふ、そうだよー、お風呂だよー」

「そう……」

「今ね、両手でね、ぬるぬるの液体石鹸をね、お腹からすくい上げるようにして、胸のところへ塗っているの……」

「……」

「あー、想像したー？」

「……」

何の反応もないので、あたしはちょっとイラっとした。

頑張って誘惑したのだから、ちょっとぐらい動揺してくれてもいいじゃないか。

あたしはそう思って、戸の隙間から、汀の姿を覗く。すると、

汀は半裸だった。というか、ほぼ全裸でブラを脱いでいた。

――おおおおおっっ！！！！

あたしは興奮した。

繰り返すが、汀はタンクトップ型のブラを脱いでいる最中だった。

見れば、寝台の上には既に脱ぎ捨てられたボクサーショーツがある。

――タンクトップブラとボクサーショーツかぁ。

質実剛健な汀にぴったりだった。

そして、そんな汀の裸身は……、

――うわー、細――い。長――い。

いや、細さについて言えば、あたしも同じだ（長さについては身長からお察しいただきたい）。しかし、汀は桁が違う。まるで、枯れ木のように細長い。

ヒトの形が相似を成すなら、体重は身長の３乗に、筋断面積は身長の２乗に比例するはず。そんな数学的原則を嘲うかのような細さだった。女なら誰もが憧れる……そうあんな細長い腕で是非まさぐって欲しいと願う様な……！

あたしがハァハァしていると、汀が突然動きを止める。そして、バスタオルをその文句なしの長身痩躯に巻き付け、両腕でキッチリとその身体を隠す。

――だよねー。あたしの胸だと、引っ掛けられるけど、汀の胸じゃ無理だよねー……って、何でこっちに来るのっ？

汀はあたしが覗いている扉を開く。

「いや、これは覗きとか、そういうのではなく……」

「……」

「っていうか、今、全裸なのはむしろあたしだよね！　つまり、覗いているのは汀の方……！」

まず、汀の右膝蹴りがあたしの顎に直撃した。

その時点であたしは脳震盪を起こし、運動神経の大半を麻痺させられた。

「……！！」

だから、悲鳴すら上げられない。

おまけに汀の右足はそのまま、あたしの下腹を蹴り飛ばす。

よりにもよって、そこを蹴るか？！――と抗議する事も出来ず、あたしの身体は吹き飛ばされ、浴室の壁に叩き付けられた。

勿論、あたしが覗いていた扉は、バンッと乱暴に閉じられたのだった。

昨夜もそうだったが、あの前蹴りは見事なものだった。両腕が塞がっていながらの、的確な二段蹴撃。剣道というよりも剣術の香りがした。良くも悪くも実戦的である。ちなみに、あたしは護身用の柔道と美容用の空手（伝統派）をたしなむ程度。

つまり……近接されたら、敵うはずもない。

あたしは大人しく湯船に浸かる事にする。

――それにしても、汀は着替えの順番がおかしくなかった？

あたしは素朴な疑問を抱いた。

普通、ブラとショーツなら、ブラを先に脱ぐものではなかろうか？　なのに、汀はブラを残し、ショーツを脱いだ。いや、もっと言えば、汀は何故ブラ以外全裸だったのだろう？　着替えるだけなら、全部脱ぐ必要があるとは思えない。汀の性格なら、脱ぐにしても、入浴室前の更衣室で、しっかり鍵をかけてから――という感じがする。

いくら、宿の客室とはいえ、あたしとの共同空間で全裸になる必要があるのだろうか？

あたしは湯船に浸かりながら、ウンウン考え続けていた。

しかし、まさか、これがこの後の決戦における伏線になっているとは思わなかった……。

＊＊＊

翌朝――。

ああ、ちゃんとした寝台と布団だと、やっぱり疲れが取れる。

すると、自然、食欲も湧く。ビジネスホテル特有の朝食バイキングにあたしは心躍らせ、駆け寄った。

「豆腐とわかめがたっぷり味噌汁にー、納豆にー、生卵にー、醤油にー、銀しゃりー銀しゃりー大盛り大盛り」

「太るわよ」

汀は端的にあたしの気分へ水を差した。

ちなみに汀は鰤（ぶり）の照り焼きと、カレーが少しと、山盛りになったキャベツだった。

「とりわけ炭水化物の取り過ぎね。おかずの量を増やしてでも、飯を減らすべきだわ」

「いやでも、あたし、山の中で米に飢えていたからさー」

だから、炊き立てのご飯には弱い。

北海道ネタに絡めるならば、米と米から作られた日本酒で骨抜きにされたアイヌみたいなものである。地元の毛皮も果実酒も差し出したくなる。そんな気分。

「米が恋しいのは私も同じよ……。だけど、体型管理のためには米の魔力に打ち勝たねばいけないの……。それこそが女子力……！」

あ、だから、そんなヘンテコな組み合わせになるわけね――とあたしは妙に納得した。

「……そんな気にしなくてもいいと思うけどな」

実際、汀はもっと肉を付けてもいいと思う。細身の麗人なのは認める。だが、胸部の脂肪はもっと増やしてもいいはずだ。

そして、あたしは味噌汁を啜り、一言。

「おお、この味噌汁、煮干の出汁が利いているね。伝え聞くところによると、かのローマ人もアンチョビやガルムを好むらしいねー。こういう鰯（イワシ）の魅力って人類普遍なのかもねー。……ああ、これと白い御飯って合うだろうなー」

「ぐぬぬぬ……」

汀は歯ぎしりしていた。が、次の瞬間、顔色を変えた。

あたしも汀も、傍から離さなかった互いの背嚢（バックパック）に手を伸ばす。
勿論、手に取るは互いの獲物――あたしの機関拳銃（サブマシンガン）と汀の野太刀（のだち）だ。

食堂に見知らぬ男がやってきたのだ。
客の視線は一斉に男に集まる。なにしろ、彼はヘルメットをかぶっていた。
この時点で本来なら通報確定であるが
「騒ぐな！　動くな！　無駄な殺しはしたくねえ！」
とヘルメット男が言うと皆が黙らざるをえなかった。
何故なら、その男は拳銃を振りかざしていたからだ。
――おまけに……これは……
「この気配、『蜥蜴擬き（トカゲモドキ）』が後ろにいたりする？」
先に汀が小声で訪ねてきたので、あたしは「ええ、多分四匹いるわ」と答える。
「四匹……そこまで気配でわかるものの？」
「気配だけで判断しているわけでもないけどね。外に車が一台来ているでしょう？」
「その車の中にいるわけか……大したものね」
汀が感心しているのが、蜥蜴擬き（トカゲモドキ）四匹についてなのか、それともあたしについてなのかはわからなかったが……。
「いいか！　変な考えを起こすんじゃねえぞ！　……包囲開始！」
という男の指令（コマンド）で、あたしの推測は裏付けられた。
四匹の蜥蜴擬き（トカゲモドキ）――四足歩行する《異形》が店内へ次々飛び込んできたからだ。
その四匹の全長はそれぞれ二メートル程、名前の由来の蜥蜴（とかげ）のように爬行している。ただ、蜥蜴と違い、尾はない。脚部は胴体より太く、鱗も毛も外骨格もない。剥き出しの筋肉に脈打つ血管。そして、鋭利で巨大な爪。
文字通りの《異形》――自律式の疑似生体兵器だった。
え？　あんな生々しいのに何故疑似がつくかって？
それはあの《異形》には核酸もアミノ酸も含まれていないからだ。よって我々の様な遺伝子も蛋白質もない。通常の生物はおろか、ウイルスやプリオンともかけ離れた存在だからだ。既存生命の運動能力を結晶細胞に模倣（エミュレート）させてはいる。しかし、アレの高分子ニューラルネットワークは既存生命とは文字通り、《異なる形》なのだ。
あ、異形の自然環境への影響がそれ程でもないのは、この辺りの理由によるらしい。既存の生命も異形も互いに捕食しても消化し難いので、いずれは相互不干渉の関係に落ち着くとのこと。

ただし、今みたいに人間に使役されている場合は別。

繰り返すが、こいつらは自律式の兵器なのだ。

実際、蜥蜴擬き（トカゲモドキ）は軍用犬の様に店内の人間を威嚇している。うーん、あれも複雑適応系（CAS）の必然か、それとも軍用犬の思考基盤を移植した結果か？

「あっ、そこの赤毛！」

ヘルメット男があたしに気付いたらしい。

「え、あたしですか？」

「そうだ！　貴様だな！　野盗のねぐらに火付け盗賊働きやがったのは！？」

「そんなっ、あたしみたいな可憐な乙女がそんな恐ろしい事っ」

あたしはきゃぴきゃぴと媚を売ってみる。しかし、ヘルメット男は語気を緩めない。

「うるせー！　こっちはちゃんと証拠を集めたんだ！　赤毛のロリ巨乳がやりやがったってな！」

ばればれか……。

しかも、汀まであたしをジト目で睨む。

「……君、やっぱり、そういう娘だったのね」

って、やっぱりって、どーいう事よ！

ああ、こんなことなら、皆殺しにしておくべきだったかな？

しかし、公開先立たず。ヘルメット男は興奮して（こいつ多分、場慣れしていないな）、あたしに銃口を向ける。

「さあ、そこで手に入れた例のブツを返しやがれ！」

「ええー。てか例のブツって何？」

「それは……」ヘルメット男は一瞬言い淀んだが、すぐに頭を切り替えたらしい。「盗んだもの全部だ。返しさえすれば、もう用はない」

「やーだもん」

「あのねぇ……」

あたしが断ると、汀まで呆れかえった。

「じゃあ、死ね」

ヘルメット男が拳銃の引き金を引く。

乾いた音が辺りに響く。

が、あたしには当たらない。当り前だ。ヘルメット男の腕前は大したことない。この距離では当てられない。これは気配ではなく、構え方でわかる。だから、跳弾にだけ気を付ければいい。そうでなければ、あたしとてこうも平然としてはいない。

とはいえ、ホテルの食堂で発砲だ。流れ弾で犠牲者が出てもおかしくない。当然、周囲は一気に騒然となる。

汀が「ちっ」と舌打ちして飛び出した。

なるほど、汀は見ず知らずのあたしを義侠心から助ける様な娘だ。今回も無関係な人間が巻き込まれるのを嫌い、巻き込んだヘルメット男を排除するつもりらしい。

そして、あの神速である。

ヘルメット男の反応は当然間に合わない。

だが、蜥蜴擬（トカゲモドキ）きたちは別だった。護衛対象であろうヘルメット男のため、汀へ次々襲いかかる。そのうち一匹の爪が汀の痩躯に触れる寸前……。

「……ちっ！」

汀が野太刀を抜き、その異形を一刀両断する。

うーむ、相変わらず、とんでもないねーちゃんである。

しかし、あたしはあたしで見ているだけという訳にもいかない。残りの蜥蜴擬（トカゲモドキ）きも続々と汀に襲いかかるのだ。汀がこの事態にどう対処するのか？　興味はあったが、ここは一つ援護する事にする。

あたしは愛用の機関拳銃（サブマシンガン）――FN-P90を抜き、そのまま片手で発砲する。

フルオートで吐き出される5.7x28mm弾が、異形の一体を正確に射抜く。

無力化に十分なはずの十発を叩きこんだ時点で、あたしは一応両手持ちに変える。

汀が囮（おとり）になっている隙に、残り三匹の自律式異形にもさらに十発ずつ叩き込む。

あっという間に、蜥蜴擬（トカゲモドキ）きはズタズタになる。結果、異形特有の【融解】が起きた。あそこまで機能分化していると、循環系が破壊された途端、代謝の速さ故に細胞同士が共食いを起こし、水と窒素と二酸化炭素に分解されていくのだ。

つまり、汀の手で最初に両断された一匹も含め、四体の異形はあっという間に消えてなくなったのだ。

「ば、馬鹿な……」

ヘルメット男は絶句していた。

自分の弾は当たらないのに、あたしの弾は百発百中なのに驚いているのか？

……まあ、これについては腕前の差だけでなく、銃器の差もあるんだろうけどね。

元々、機関拳銃（サブマシンガン）の命中精度は拳銃（ハンドガン）を上回る。とりわけ、あたしのFN-P90は人間工学に基づいた高度な設計のおかげで、機関拳銃（サブマシンガン）の中でも際立って優れた性能を誇っている。いや、このP90って、正確には機関拳銃（サブマシンガン）じゃなくて、PDW――個人防衛火器（Personal Defense Weapon）という分類になるんだけど。

いずれにせよ、ヘルメット男の拳銃――多分安物のトカレフよりは格段に上なのだ。
そして、あたしにはその性能を十全に引き出せる技能がある。
ヘルメット男には悪いが、相手が悪かったね。
何しろ、あたし一人でも圧倒的なのに、前衛を担当する汀がまた凄い。
汀は呆然とするヘルメット男につかつかと歩み寄り野太刀を一振りする。
すると、そのトカレフだけが斜めに両断された。
「おおー、御美事也（おみごとなり）」
と、あたしは思わず拍手した。日本刀が鋼鉄をも斬るのは有名な話だが、実際には色々な条件が必要になる。卓越した技能はその絶対条件であり、汀は齢十七にしてその境地に到達しているらしい。
「去りなさい。さもなくば、次はその仮面を斬るわ」
え？　殺してしまった方がいいんじゃない？
あたしはそう言いかけたが、ヘルメット男は
「……わかった。ここは引かせてもらう」
とその場から、すたこらさっさと逃げだした。
気配が遠のいたのをきっかけに、汀が野太刀を鞘に納める。
「さて」
これにて、一件落着……とはいかなかった。
周りの視線があたしたちに突き刺さっていたからだ。
今回、人死にが出なかったとはいえ、銃弾が飛び交う一件ではあった。異形の死体は液状化しているとはいえ、すぐに消えたりもしない……ていうか、あれ、床のシミになるかも……。
元々、ここは日本らしい中堅ビジネスホテルだ。いくら北海道の治安は悪化しているといっても、これを平然と受け入れれる客層ではない。
恐怖と嫌悪が入り混じった、忌避感がひしひしと伝わってくる。
うーん、仕方がない。ここは超絶美少女たるこのあたしの、媚び媚びな笑顔で、一発空気を変えてやろうか！
と、思っていたら、汀は静かに席へ戻った。
そこで汀は鰤を口に入れ、キャベツを貪り、最後にカレーで無理やりかき込む。
強引でさほど旨くもないであろうその行為が、何故か気高く見えた。
だからあたしも御飯に生卵と納豆と醤油をかけて頬張り、最期に味噌汁でかき込む。日頃は嬉しい豆腐とわかめの具沢山がちょっときつかったが、無理矢理飲み干す。

そして、汀は足早に出口へと向かって、

「少し早いですが、チェックアウトです。お釣りは結構です」

と、財布から現金三万円を差し出す。

ちなみに会計は汀に任せているので、あたしはこのホテルの宿泊料を知らない。だが、三万円という金額が迷惑料を含んでいる事は容易に察せる。

もっとも、それでもホテルの店員はそれを断る。

「い、いいえ。お釣りは一万と三千五円になります。どうか、お受け取りになって下さい」

彼の声はやはり脅えていた。銃声が耳に残っていたのだろう。しかし、その上で正規の釣り銭を押し付けるように汀へ渡す。

汀はそれを渋々受け取ると、淡々と言う。

「では、料理長に伝えておいてくれますか？」

「……うちはチェーン店です。料理長も非正規ですよ」

「関係ありません。美味しかったです」

「……」

「ゆっくり味わえなかった事は謝罪します。また、来てもいいですか？」

「ほっ、他のお客様のご迷惑です。ど、どうか御遠慮下さい」

……うわ、この人、勇者だな……。

あたしの銃も汀の刀も、所詮は人殺しの道具だ。そして、その人殺しの力を、彼は今、その目で見た。その上で彼はこう言っているのだ。

――なら、撃ち殺してやろうか？

あたしの衝動を、しかし、汀が制止した。

わずかに殺意を抱いた瞬間、汀はあたしの腕を掴んだのだ。

「早く行きましょう……私は君を斬りたくはない」

＊＊＊

街中を歩きながら、あたしをからかってやる。

「汀ってさ、お優しいんだねー」

「……私は人斬りＳＡＭＵＲＡＩガールとは違う。山姫姉さまの様な真の剣士を志している」

汀はそんな風に返した。いや、誰だよ、そいつら。

「で、その汀があんな山中で何をやっていたの？」
「言ったでしょう。校外学習よ」
「その設定まだ続けるの？」
「事実として、校外学習でもあるの。他にどう言えと？」
「今、係助詞の『も』を使った理由よ」
あたしが指摘してやると、汀は己の失言に気付いたらしい。少し歯噛みした上で、律義に答えてくれる。
「……産学連携事業だから、企業も絡んでいる」
「高校で？　飛天市じゃあるいまし……」
「私はその飛天市市民なのよ」
「なるほど……」
飛天市は《荒夏》亡き後も、行政特区としての地位は健在だ。
「ちなみにその企業って？」
「蜻蛉切製作委員会」
「何それ？　ベンチャー系？　聞いた事がないというか、それ、アニメの話？」
「そんなところね。実際、漫画みたいな計画だし」
「でも、製作委員会方式という事は……出資者は？　あ、いい、自分で検索……」
するからと、あたしが携帯端末を取り出す。しかし、その前に汀は言う。
「《炯眼商会》よ」
「ああ、飛天市の支配者か……」
「名目はあくまでも一企業よ。実質でも経済的支配者に過ぎないわ」
「そしてある意味では《荒夏》の後継者でもある――と」
何故なら、《荒夏》の結晶細胞技術はそのほとんどが《炯眼商会》に引き継がれたからだ。
「で、その《炯眼商会》の金で汀は何をやっていたの？」
「勿論、野外活動を通した心身の修練よ」
なんじゃそりゃ？
と、思っていたら、あたしの背筋にゾワっとした気配が走る。汀も同じだったのか、足を止める。
昨日の野盗や今朝のヘルメット男とはケタ違いの……脅威！
あたしと汀が一斉に振り返ると『そいつ』は言った。

「話がある。お茶にしよう」

続くかも